JR 灘駅北駅前広場から北方向のミュージアムロードをのぞむ

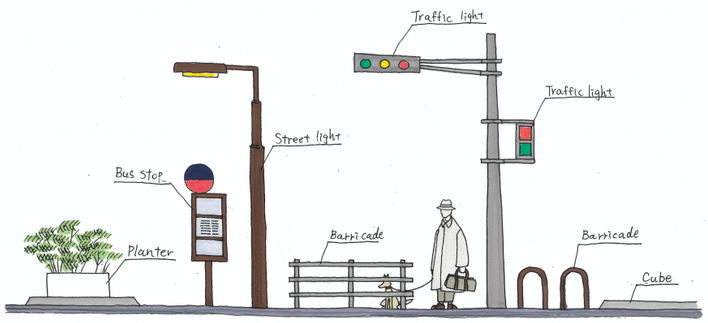
コンテクスト｜地域がもつ地層としての文脈

ミュージアムロードは、南北にのびる“山と海”という神戸特有の大きな自然軸に対し、阪神高速・国道 43 号線・2 号線・阪神電車・JR・阪急・山手幹線が幾重にも走る、強い東西の帯状構造を宿す場所に位置している。

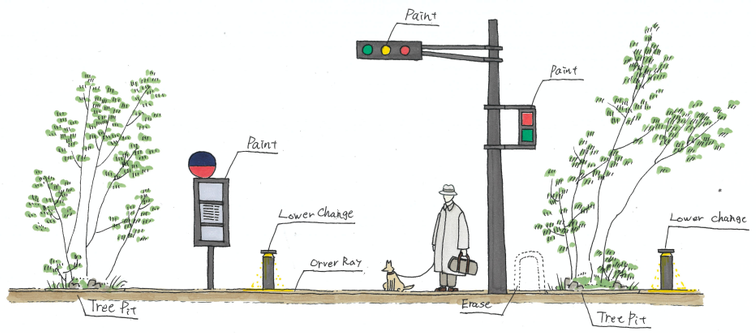
その東西レイヤーの中に、王子動物園、原田の森美術館、BB プラザ、兵庫県立美術館といった文化施設が点在し、文化資源は「点」として静かに佇んでいる。

本プロジェクトは、これらの点を“線”としてつなぎ、さらに“面”として広げていく
——そんな未来を見据えた、都市スケールの文化回廊づくりである。

Before



After



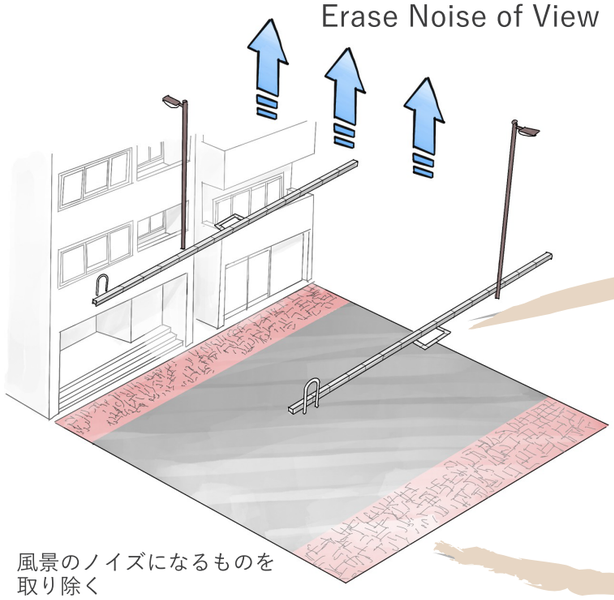
プロジェクトの方向性

○ Erase | 余分なものを消し、風景のノイズを整える

既存のガードレール、街灯、標識など、歩行景観を妨げる公共物は、撤去・再配置・リデザインによって静かに背景へと退く。

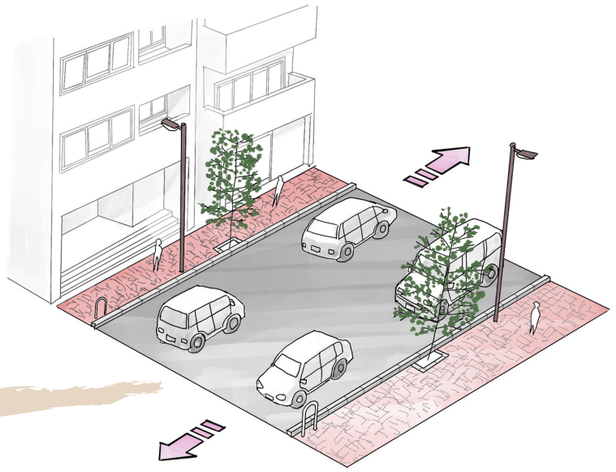
“不要な線を消す” ことで、この場が本来持っていた
道の奥行き、木々の連なり、空の広さが素直に立ち上がる。

Erase Noise of View



風景のノイズになるものを
取り除く

Lifeless



活気のない通り

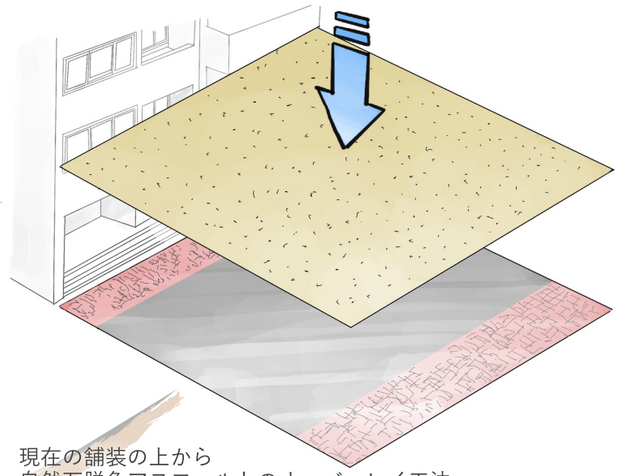
○ Overlay | 色と質感を重ね、道の階層を整える

灘駅の南北で途切れてしまうミュージアムロード全体に、土色の脱色アスファルトを
“オーバーレイ” として重ね、歩道と車道を柔らかく包む。

これにより、
- 歩行空間の連続性
- 南北のひとつながりのリズム
- 車の存在をそっと背景化させる “歩行者天国的な広がり”

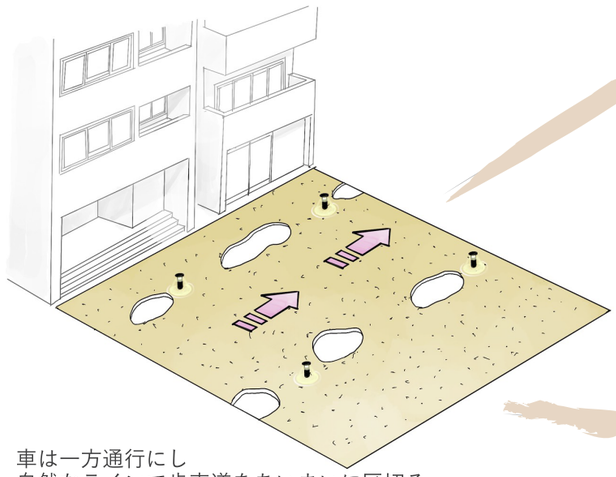
が生まれ、道は「交通の通路」 から「滞在し、憩う場」へと変わっていく。

Over Lay



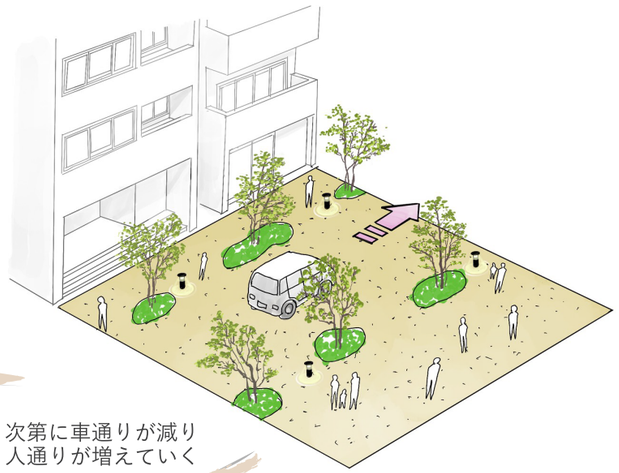
現在の舗装の上から
自然石脱色アスファルトのオーバーレイ工法

Natural Line & One Way

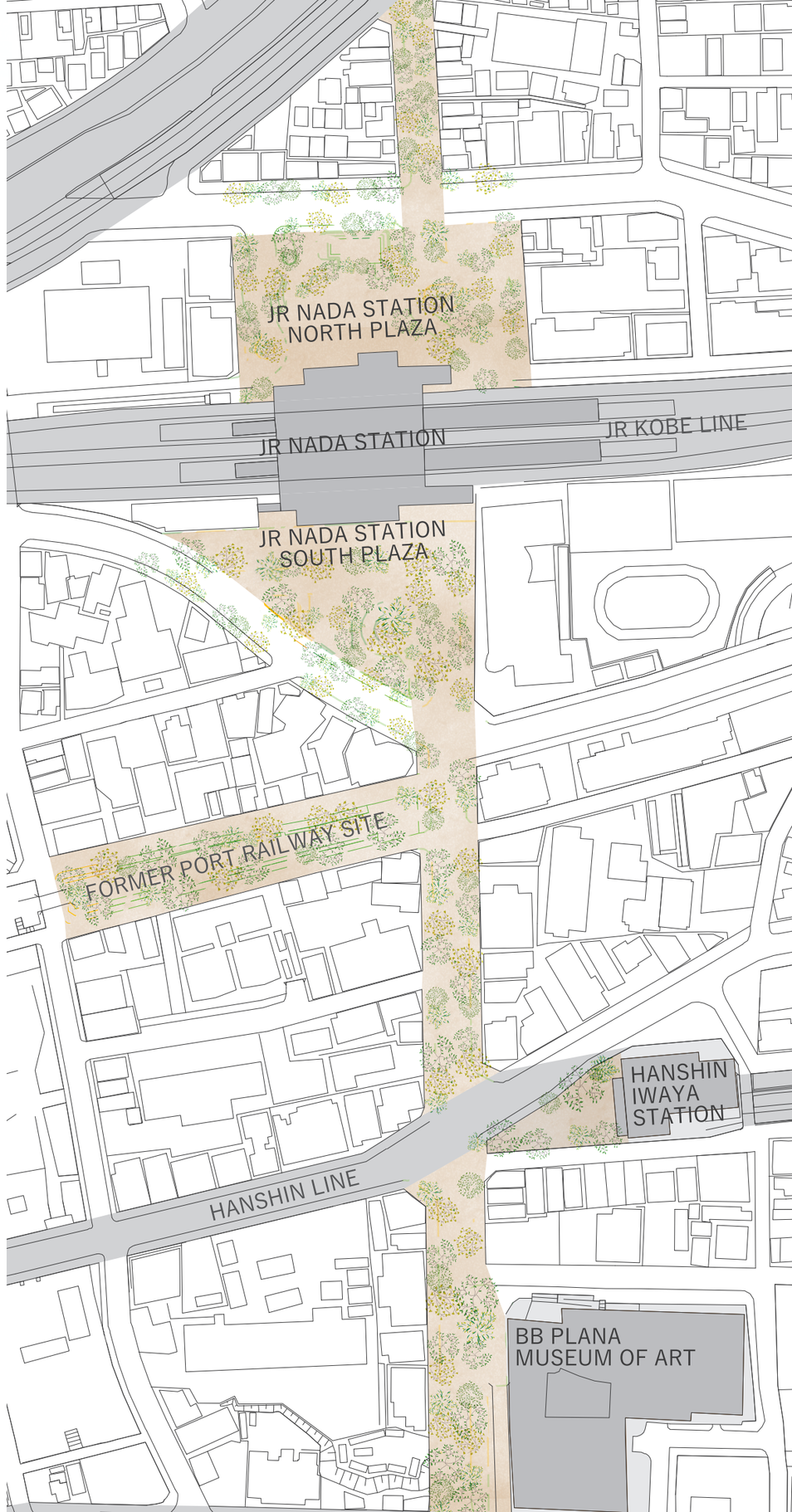


車は一方通行にし
自然なラインで歩車道をあいまいに区切る

Decrease Cars
Increase Pedestrians



次第に車通りが減り
人通りが増えていく



Lively

活気のある通りになっていく

○ Green｜緑が導く界隈性と歩行の目的化

一部車線の一方通行化により歩道にゆとりをつくり、神戸のシンボルツリーでもある
トウカエデとソメイヨシノをリズムよく植樹していく。

“ただ通過する道” から、
“緑を感じるために歩きたくなる道” へ。

季節を映す樹木、風に揺れる草など柔らかな植栽帯が、ミュージアムロードに新たな
界隈性を息づかせる。

臨港線跡がミュージアムロードにもたらす価値

○ 歴史の時間軸を内包する風景

かつて港湾物流を担った臨港線。鉄路から遊歩道へと姿を変えたこの場所には、産業の記憶・都市の成長・廃線の詩情が折り重なり、時のレイヤーが静かに沈殿している。

○ 南北を縫い合わせるランドマーク軸

圧倒的に東西の力が強い地域構造の中で、臨港線跡は数少ない “南北の物語” を紡ぐ場である。
文化施設群をゆるやかに結び、歩行者のための 都市の回廊（プロムナード）として空間と時間の糸を織り上げていく。

○ ランドスケープとしての再生

かつての鉄道インフラの残響を素材として再編し、レール、ベンチ、アートオブジェを点在させることで、この場所に「歩行が風景を紡ぐ時間」を宿らせる。

鉄道が運んできた時間は、
人の歩みによって “場の物語” へと姿を変える。

臨港線跡とミュージアムロード南方向をのぞむ

終わりに

「ミュージアムロード」は
文化と暮らしをつなぐ
東西の流れに抗わず
その隙間をそっと縫うように
光と
風と、
人々の記憶を
ひとつに束ねていく道である